

海外便り

## エチオピア通信 (2)

中山 実

### 1. はじめに

エチオピアは、東アフリカで一番安全な国とされており、実際のところ、深夜においても車で移動する限りにおいては危険を感じることはありません。ただ、近頃では、アディス・アベバ近郊の町において、ピストル等を使用した強盗事件が発生するようになってきています。私達も、道路調査等での地方出張が多いので、細心の注意が必要となってきています。日本も近頃では物騒になってはきましたが、まだまだ世界に誇ることできる安全な国だと思います。エチオピアには、経済のみならず、治安の面においても日本を参考にし、素晴らしい国に発展して欲しいと願います。

さて今回は、ある式典の準備の際の経験からエチオピア人の仕事の進め方について印象に残ったことを中心にご報告させていただきたいと思います。

### 2. プロジェクトの近況

本プロジェクトにおける私の担当分野は、機械化施工による“道路保守”となっております。私の他に、“道路運



写真一 作業風景 (中央：山名専門家, 右：二川専門家)

転操作”“建設機械整備”の2コースが予定されており、2人の専門家が私と同時期(2002年4月)に赴任しており、2003年4月からの新訓練コース開講に向けて、エチオピアの現状を調査しながら、カウンターパートと共に、カリキュラム・教科書等の作成に取り組んでいます。本原稿を書いている現在は、まさに本番寸前という段階でして、教科書の作成、OHP等の資料の作成等に追われる日々を過ごしています。

### 3. 式典の準備にて

1月31日に日本政府によって供与された建設機械等の機材の受け渡し式典(ハンドオーバーセレモニー)がアラムガナ道路建設機械訓練センターで行われました。当日は、関係方面から多数出席され、約100人程度の方々が来られました。このセレモニーの様子については、後日、エチオピア国営テレビで放映されました。

式典の主な出席者は以下のとおりです。

エチオピア側

公共事業省副大臣

人材開発省建設部長

ERA(エチオピア道路庁)総裁

ERA副総裁

ERA人事部長

建設業協会会長

日本側

大使代理

JICA所長

この1月31日を迎えるまで、日本サイドからすれば冷や冷やものだったのですが、エチオピアサイドにすれば、何も問題なく迎えたようです。この背景には、やはり大きな文化の違いが感じられます。私がエチオピアに赴任してから1年が経とうとしている現在では、エチオピアの文化を理解することができるようになってはきましたが、完全に理解することはかなり難しいです。

ここで簡単に説明させていただきます。例えば、日本において、このような大きなセレモニーを行うとすれば、式典日を決めて、誰を招待するか、また、式典の会場はどこにするのか等々、ありとあらゆる考えの元、2~3ヶ月前には計画を立て始め、2、3週間前には、あとは、本番を迎えるのみという状態が普通だと考えるのですが、エチオピアでは大きく違います。彼らからしてみれば、“なぜそんなに早く計画を立ててるのか、時間はたっぷりあるのに”という考えが背景にあるようです。そのため、式典の準備に本格的に取りかかったのは、式典日の約1週間前です。このような行動は、多くの日本人には理解が難しいと感じます。

日本で、こんな段取りを行えば、上司のみならず、ありとあらゆる関係者からのカミナリを受けるだけでなく、自分自身が疲れてしまうことになると思います。規模や内容が異なるため、あまり良い例ではありませんが、今年9月に開催される CONET 2003（平成 15 年度 建設機械と新施工技術展示会）の準備を5月のGW明けぐらいから始めるような感覚でしょうか。ところが、エチオピアでは、このような感覚でいるのが職員の一部だけでしたら理解できるのですが、センター長であっても同じような感覚です。私自身も頭ではある程度段取りを理解しているつもりなのですが、彼らに“〇〇は済んだのか！ △△の準備はどんなのか！”等々確認してみても、常に彼らの回答は“任しておけ！ 問題なしだ！”だけでした。

そして、とうとう式典前日です。“本当に大丈夫なのかどうか、明日は式典なのに…”とっていると突然、センター職員が総動員で、今まで見たこともない機敏さで、自分の役割をもくもくとこなして準備を始めました。この変化を言葉で簡単には表すことが出来ませんが、強いて挙げるとするならば“劇的”という言葉が近いかも知れません。それぐらいの変化です。

するとどうでしょう。センターの勤務時間終了1時間前に式典の準備が滞り無く済んでしまいました。まさに“圧巻”です。少し例えが悪いですが、この時、ふと私は、小学生時代の夏休みを思い起こしました。親に“宿題をしろ！”と、どれだけ怒られても、行わず、夏休み最終日に死に物狂いで完成させ、始業式に間に合わせたことを、です。

しかしながら、私が赴任してから何かにつけて、エチオピアサイドの行動はずっとこんな調子です。期日には何とか間に合わすけど、ギリギリまで何もしないという姿勢で



写真—2 ハンドオーバー式典の様子

す。だから今までは、そのような段取り考え方を受け入れることが出来ず、よく怒っていたりもしました。が、よく考えてみれば、これらの行動は、やはりエチオピア人には、エチオピア人独自の物の動かし方があるのは当然であるのだから、日本のやり方が正しいという訳ではないということなのです。結局のところ、今回についても目標はセレモニーを行うことであって、計画を立てることではないのです。そう考えると日本の考え方・やり方が、本当に正しいのかが、わからないのです。結果は、セレモニーは成功に終わったのですから。

#### 4. 今回の教訓？

今回の件で、私自身で考えました。それは、私の頭の中で、プロジェクト目標・内容等の詳細が赴任前より決められていたために、頭では、エチオピアを尊重すると考えていても、頭の片隅では、本当はエチオピアのことを考えていなかったのかも知れなかったことです。結局、その片隅のこと柄が、自分の考えの大部分を占めるに至っていたのです。この点は、私自身多いに反省するべき所だと思いました。

以前に、専門家を経験された方が、こんなことをおっしゃっていたと聞きました。

“上手く行かないことを調整することが主務であり、それが上手くいった時が、最高に充実感がある。最初から上手くいくプロジェクトが稀であり、現地と如何に折り合いをつけていくのかが楽しい”と。

近頃、この専門家がおっしゃっていたことが理屈ではなく、骨身にしみて分かってきた気がします。この境地に達するのは、現在の私には、なかなか難しいかもしれませんが、本当の考え方の柔軟性とはそんな所にあるのかなあと考えます。

そうは言っても、エチオピア人に合わせてばかりでは、何のために日本から来ているかが判らないので、曲げてはいけないことは曲げずに、今後は、“物を変えるもので無く、物の観点によって変る”という考え方を持って、新訓練コース立ち上げ並びに残りの任期に臨みたいと思います。

次回のエチオピア通信では、“そうは言ってもエチオピア人は頑固である”と題してエチオピア気質についてさらに言及したいと思います。

では、次回をお楽しみに。